古文の窓❺

# 和文と和漢混交文

## 教材のねらい

文章は、内容と文体からできている。

現代において一般的な文体に、常体（「だ・である」体）と敬体（「です・ます体」）がある。常体で書いても敬体で書いても趣旨が変わらない場合、どちらの文体を選ぶかは、内容とは別の要素（例えば公的な文書か私的な文書か）から判断することになる。

近代より前の日本には、現代よりもはるかに多い種類の文体が存在した。例えば公的な文書は漢文で書く、手紙は候文で書くなど、書くべき文書の種類によって、使うべき文体の種類も異なっていた。文学の領域でも、物語は和文（鎌倉時代以降は擬古文）、軍記や読本などは和漢混交文といったように、ジャンルによって使われる文体がおおむね決まっていた。

しかし近代以降、こうした文体の多様性は失われていった。現代において、近代より前に書かれたもの（例えば古典文学）を原文で読むことは、かつて人々が読み書きしていた多様な文体の一部にじかにふれる経験をすることでもある。

この教材では、古典文学の文体とその多様性に目を向けることを第一のねらいとしている。『伊勢物語』と『平家物語』の例を通じて、古典文学の文体は一様ではないことに気づかせたい。

また、なぜ古典文学の多様な文体を知る必要があるのか（なぜ古典文学を原文で読む必要があるのか）ということについても、理解させたい。

## 解説

古典文学に見られる主な文体に、漢文、和文、漢文訓読文、和漢混交文がある。

漢文と漢文訓読文の違いは、漢文の学習をした生徒には理解しやすいと思われる。それらの具体例は、必要に応じて「漢文入門　訓読の世界」（一一七〜一二三ページ）を参照したい。

和文は、主に和語によって構成されている文章である。和語とは、『岩波国語辞典　第7版新版』（岩波書店）によれば「漢語や西洋などからの外来語に対し、日本固有の単語」である。

和文の具体例としてあげられているのは『伊勢物語』「芥川」の冒頭の文章である。まずは、この文章の現代語訳をおさえておきたい。ポイントは「よばひわたりけるを」が「求婚し続けたが」と訳せることを確認することにある。「よばふ」と「求婚する」は同じ意味であるが、「よばふ」は和語で「求婚」は漢語であることを確かめさせたい。

和漢混交文は、和文と漢文訓読文がまざりあったものである。和漢混交文を読むには、漢語の語彙はもちろんのこと、和語の語彙や文法もある程度は身につけておく必要がある。

ところで、なぜ古典文学を原文で読み、そこで使われている文体を知っておくことが必要なのだろうか。

例えば現代では、多くの人にとって、日常生活のなかで和文や漢文などを自ら書く機会はほとんどないだろう。ならば、それら

は学ぶ必要がないのだろうか。あるいは、趣味として学びたい人だけが学べばよいのだろうか。必ずしもそうではない。

古典文学を読み、現代では使わない語彙や文法をわざわざ学ぶのは、その経験が、生きていく上で思いのほか役に立つことがあると考えられるからである。

飯倉洋一は「未来に活かす古典―「古典は本当に必要なのか」論争の総括と展望」において、次のように述べている。

古文・漢文の学習の意義は、将来、読む可能性のある古文・漢文ないしは、古文・漢文的表現を含む現代文に対した時に、それに適切に対応する読解力、さらには実用的な言語運用能力の養成である。または、過去の膨大なテキストを利活用しようとする時に必要な技術の修得である。

ここで言われている「過去の膨大なテキスト」には、当然ながら、文学以外の分野のものも多分に含まれている。

人間は、さまざまな文章に出会いながら生きるものである。例えば将来、仕事上の必要から、明治期に書かれた文章を引用しながらまとめられた文書を読まなければならないことがあるかもしれない。

明治期は、時代区分の上では近代である。しかし日本語の表現においては、近代より前の時代から引き継がれた文語文（漢文・和文・漢文訓読文・和漢混交文など）や、言文一致体などの多様な文体が存在していた時代であった（詳しくは「明治期の文語文と口語文」一七七～一八〇ページを参照）。

そうした時代に書かれた文章を読まなければならなくなった時、少しでも和文や漢文、漢文訓読文や和漢混交文に親しんだ経験があれば、また、古語辞典や漢和辞典を引いた経験があれば、読解のハードルはずいぶん低くなるだろう。

古典文学の内容を知りたいだけなら、現代語訳で読んでもよいかもしれない。しかし、古文・漢文を読むことの有効性を考えるなら、どんな作品でも、原文で読む経験をしておくのが結局は一番よいのではなかろうか。

## 参考

日本語学会編『日本語学大辞典』（東京堂出版、二〇一八年）の「和文」の項目では、和文を次のように定義している。

広義には日本語で書かれた文章を意味する。漢文・英文などに対応する言葉として用いる。「日本文」「国文」「邦文」などということもある。狭義には、日本文のなかでも、和語（＝やまと言葉）を用い、おもにひらがなを用いて書かれた文章をさす。その典型は、平安時代の物語などの優雅な文章である。表記法に注目して「仮名文」「ひらがな文」ということもある。この場合、確かに仮名を中心としているが、漢字表記された漢語が若干含まれていることに注意しておく必要がある。

同じく『日本語学大辞典』の「和漢混淆文」の項目では、和漢混交文を次のように定義している。

従来用いられた概念は必ずしも明確でないが、和文と漢文（訓読）との混用の文の意に用いられ、表記の上からは多く漢字仮名交り文をさして、具体的には主として鎌倉時代以降

の『平家物語』『太平記』などの軍記物語等の文体をいう。この種の文は、中古の和文と漢文訓読文の語法に基づき、漢語を多く加え、更に中世以降の俗語なども併用し、その中には変体漢文の要素も多いのが普通である。広義には、和文・漢文訓読の両文脈の要素を併せ含む文体一般をさすことも出来るが、必ずしも一般的ではない。「漢字仮名交り文」は表記分類上の概念であり、「和漢混淆文」は文脈分類上の概念であって、対立するものではない。

飯倉洋一「未来に活かす古典―「古典は本当に必要なのか」論争の総括と展望」は、荒木浩編『古典の未来学―Projecting Classicism』（文学通信、二〇二〇年）に収録されている。

風間誠史「近世和文とは何か」（『近世和文の世界―蒿蹊・綾足・秋成』森話社、一九九八年）では、近代を「生産と消費の効率化を最大の目的とする社会」とし、「誰もが、いつでもどこでも容易に書け、容易に読める文章が近代的文章表現ということになる」と述べている。また、「文章表現における近代と前近代を分かつものは、多様な文体と均一な文体という事象ではなく、多様性を自明のことと考えるか、それを何とか均質化しようとするかという指向性の違いということになるだろう」と指摘している。

明治期の多様な文体については、加藤周一・前田愛校注『文体』（日本近代思想大系、岩波書店、一九九九年）が参考になる。

（佐藤　至子）